

統合医療で がんに克つ



特別インタビュー

重視する点としては、がん細胞とがん幹細胞の両方をにらんだ治療を行うことです

私のがん治療

統合医療 ハートフルクリニック 平良 茂院長に訊く

シリーズ

医療の現場から

スピッククリニック

松村浩道院長に訊く

患者さん1人1人にしっかりと寄り添う、患者さん中心の医療が大切だと考えています
——エビデンス・ベースド・メディスンとナラティブ・ベースド・メディスンは、互いに補完しあう関係です

特集 がん治療と機能性食品

注目される植物性天然抗がん成分「サルベストロール」

柳澤厚生 国際オーソモレキュラー医学会会長 スピッククリニック名誉院長

リポ・カプセルビタミンCとがん治療

——リポソーム型ビタミンCの効果

松村浩道 スピッククリニック院長

抗がん剤治療や放射線治療の副作用を軽減できるだけでも、
サプリメントを用いるに足る理由になる

北 廣美 医療法人やわらぎ会やわらぎクリニック 院長

ロングセラー健康食品 環状重合乳酸 (CPL) 使用体験
アンケートから見えること

取材協力/ユウコーエンタープライズ

取材・文/高山健二 医療ジャーナリスト

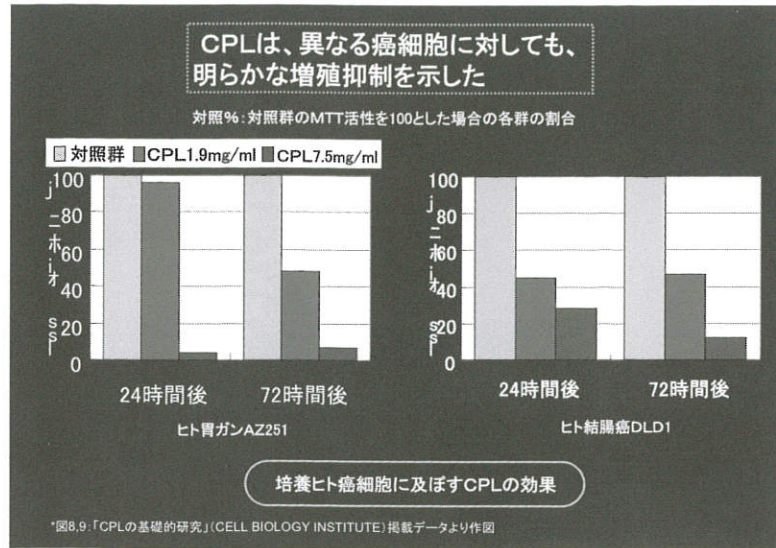


図6 培養ヒトがん細胞に及ぼすCPLの効果

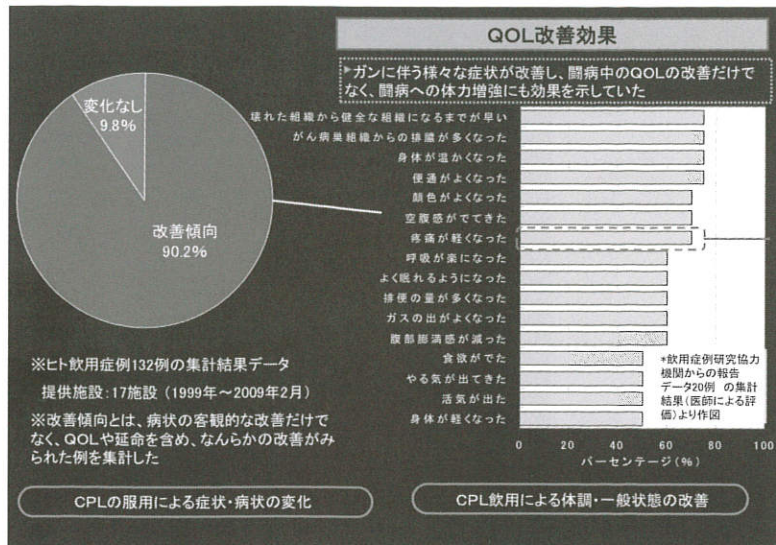


図7 CPLの服用による症状・病状の変化ならびに、CPL 飲用による体調・一般状態の改善

がんにかかる人は年間100万人に達しようかとしていますが、治療前の生活に戻れる人、がん治療をしながら働きに出る人が、今後急増するはず。その人たちにとってQOLの維持・改善は、きわめて重要なテーマとなります。環状重合乳酸はそれを支える心強い存在になるのではないのでしょうか。

す。こんな現状にあつて、がんに対する健康食品・機能性食品に求められる役割は、以前と少し違ってきているのではないのでしょうか。以前は何よりがんの縮小率に期待して、そのような報告がよくなされてきました。しかしいずれもごくまれなケースを抽出して紹介している、あるいは抗がん剤や放射線治療の効果と分別できかねるものがほとんどでした。3大療法が無効になった患者さんの利用が多かったのも、そんな背景があつ

たからだと思えます。ただ前述したように、がんの縮小率は3大療法において着実に改良されています。今後、新しい治療法が続々と開発されて、その傾向はますます強くなるでしょう。しかし3大療法およびその併用療法で、欠けている部分、十分でない部分があります。それはがんと共存しつつ、日常生活をキープしていくうえで、きわめて重要なQOL(生活の質)の維持です。がんは縮小した、でも気分や体調

が悪くて、寝てばかりいる、休んでばかりいる、家の外に出るのもままならない、というのでは問題です。それを改善し、元気ががんと闘うという闘病の仕方が重要になります。がん治療の発達により、現にそのような患者さんが急速に増えています。環状重合乳酸は、がんの増殖抑制においてもよいデータがあるのですが、安全性およびQOLの維持・改善で、好ましい実績をあげています。2009年からおよそ

1年間、利用ユーザーに対し、飲用モニター調査が行われました。直筆の手紙や医療機関の検査票が添付されているものもあり、胸に迫る内容です。計34名から回答があつたのですが、「飲用目的」の欄で10名ががん患者さんとなっています。「飲用後の違い」では、治療後の体力回復、がんに伴う症状改善などをあげています。QOLの改善につながっていると見ることが出来ます(図3、図6)。QOL改善については医療機関の患者さんを対象とした調査と学会報告があり、その結果については図7「QOL改善効果」をご覧ください。ただ、どんな症状か、がん種(部位別がん)それぞれはどうか、といった詳細がわかりません。ユーザー調査と結果についてはほぼ符合します。

らんどです。それも大事なことです。そこに恣意的な意図が紛れ込むことが多く、信憑性・信頼性の点で疑問符がつくものが多いと見られます。多くの医療機関が採用・導入して、実際に患者さんに対して使っているのであれば、医師はその使用感について、患者さんに訊ねたり、検査で調べたりすることが出来ます。数例について医学的・科学的に調査を行えば、症例報告として発表できます。一定のまとまった数になると、症例報告より証拠能力の高い研究としてまとめ、学会などで発表することも可能になります。

したがって医療機関の導入例、これからの健康食品・機能性食品に、求められよう。1990年頃までのがん医療は

手術、放射線、抗がん剤の順にリリースに実施していきのが普通でした。現在はこの3つを組み合わせることが主流となっています。手術の後、あるいは前に抗がん剤、放射線と抗がん剤の組み合わせもよくあります。そして2000年代に入ってから、世代的抗がん剤とも言うべき分子標的薬の開発が相次いで、多くのがん医療の標準療法になつてはならないものとなっています。がんの増殖に深く関わっている遺伝子やタンパク質が相次いで発見され、これを標的にして、がんの増殖を阻むのです。副作用が少ない

ことと、がんを治癒させることとは異なるものの、抗がん剤と違って効果的であれば数年単位で継続して使用できることから、がんとの共存を可能にする薬剤といってもよいかもしれません。薬剤によっては使用前に検査をして、自分にとって有効かどうかを調べることも出来ます。抗がん剤のようにやってみなければ効くかどうかはわからない、というのではなく、効果的だと思われる人だけに投与するので

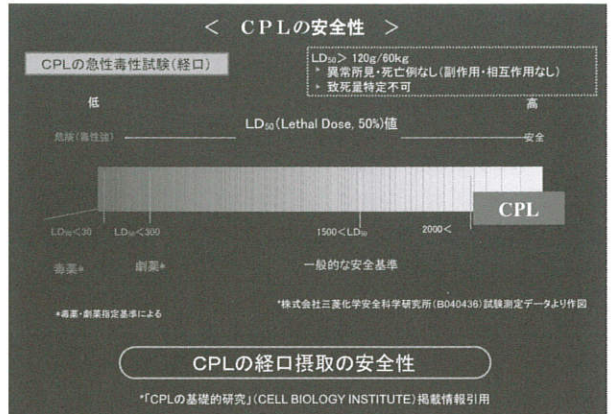


図3 CPLの経口摂取の安全性

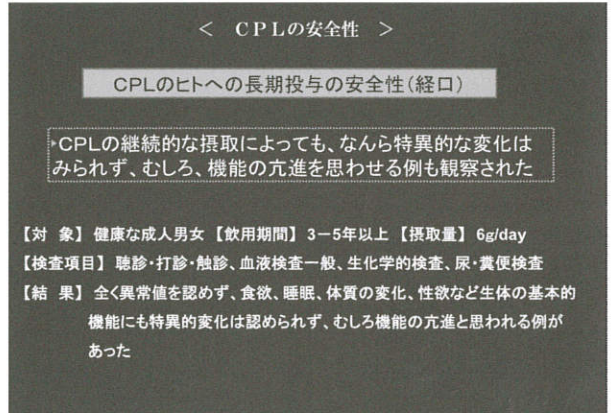


図4 CPLのヒトへの長期投与の安全性(経口)

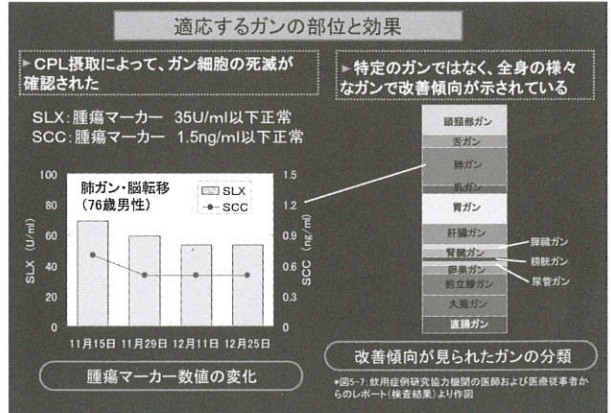


図5 適応するがんの部位と効果

す。したがってその事前検査ができる薬剤については、無駄な副作用に苦しむことはありません。アメリカでは、新規の抗がん剤の承認において、すでにこの分子標的薬がとくに過半数を超えるようになってきます。日本でも手術や放射線治療と組み合わせたりすることが急速に進んでいます。この分子標的薬は吐き気や抜け毛、倦怠感などの副作用はほとんどないのですが、薬剤によっては皮膚障害など特有の副作用があります。いずれにしろ3大療法の併用療法などによって、がんの縮小率や延命期間は改善されてきていま